



「ゴキブリと我々だけは生き残るぞ！」 安間伸氏に聞く「ワイルド」な投資戦略

対談: 安間 伸 氏、
岡本 和久
レポーター: 佐藤 安彦

安間 伸 (あんま しん)・・・自己紹介の弁

CFA(CFA 協会認定証券アナリスト)、CMA(日本証券アナリスト協会検定会員)

金融界の日本代表を目指し、日々精進を重ねる若手(???)投資家。

1965年鹿児島県枕崎市生まれ、静岡県立藤枝東高出身。

一橋大学法学部を卒業後、三菱信託銀行にて債券デリバティブ・トレーダー、その子会社の投資顧問会社でファンドマネージャーとして資産運用の道へ進む。その後シティトラスト信託銀行に移籍し、個人富裕層向けグローバルバランス商品の運用を担当。特にグローバル債券運用、先物・オプションを使った裁定取引、投資パフォーマンス評価、投資税制、システム開発などに精通する。いつも投資収益を最大化することばかり考えている筋金入りのコントラリアン(逆張り投資家)である。

学生時からの麻雀の勝ち金でビッグ(信託銀行の貯蓄商品)を積み立てたのを皮切りに、外国債券・株式などへの投資で個人的な資産を増やす。申し訳ないことに自分が会社で担当していた商品をはるかに上回る好成績で、30代前半から毎年の投資収益が給料を上回り続ける。(正確に言うと2001年は給料のほうが高かった。ITバブル崩壊で家1軒分ぐらいのカネを高値から吹き飛ばしたので)

「平均的な」指数に追随しなくてはならないファンドマネージャーがつまらなくなり、従業員として働くことにも飽きたので2002年に退社。しばらくブラブラしていたが、なぜか社会に恩返しをしようと思いつき、ついに2006年6月、ワイルドインベスターズ株式会社を設立。投資顧問助言登録して投資アドバイスの提供を始めた。運用の最前線に立ちながら、「日本を投資大国にする！」ための教育を提供している。

趣味は、サッカー、テニス、釣り、スキー、読書、投資用不動産探し、昼寝・・・、etc
ブログ:「それを教えちゃまずいだろ」

岡本: 自己紹介の弁でかなりご説明いただきましたが(笑)、安間さんの現在の仕事内容の紹介や自己紹介をお願いできますか。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

安間: かれこれワイルドインベスターズを始めて12年になりました。最初はファンドへのアドバイスと投資助言のレポートを業務として始めました。ファンドのほうは無くなってしまったんですが、助言レポートを読んでもくれる人が増え続けたおかげで今も会社を続けています。投資対象はグローバルで何でもありの投資を提供しています。日本の機関投資家はグローバルを見ている人が少ないので、今までやってくるのができたのかなと思っています。ブラックマンデーやイールドスプレッドなどの話を聞きたがる若い人や経験の無い人が今は多いのだと思います。それで、一種の語り部として期待されているところもあって、会員数が、今でもジワジワと増えている理由なのかなと思います。

岡本: どうしてワイルドインベスターズを起業しようと思ったのですか。

安間: はい。知り合いの知り合いがFX詐欺で騙された事がきっかけです。聞けば、「どう考えても詐欺だよね」という話なのですが、それでもみんな迷っているんですね。「こんなおいしい話があるのに、安間さんは『詐欺だからやめておけ』って言っている」と言われていた状況でした。我々の世界ではこれは詐欺だと当たり前に分かる話も、一般人には分からないんですね。つまり、我々にとって普通の能力が一般的には特殊能力と言われるんだなと思ったのと、詐欺をしている人に対する怒りを感じました。自分達は、苦労してお金を集めて運用しているのに、なんでこんな手口で簡単にお金が集まるんだと、半分嫉妬にも似た感情が湧いてきたんですね。



岡本: 当時、安間さんは大手の金融機関に所属していたのですか。

安間: そうです。シティにいました。その頃、本を出すことになったので、ブランド名を付けようという話になりました。私がソフィスティケート・インベスターみたいなのは好きではないので、「地球が減びても、ゴキブリと我々だけは生き残るぞ」という意味で、ワイルドインベスターズと名付けました。でもその時は、まさか会社を興すときの社名になるとは思っていませんでした。別の名前にしようと言ったら、一緒に会社を興した人から「安間さん、その程度の気持ちでワイルドインベスターズって名前を付けたんですか」と責められてしまい、そのまま始めることにしました。

岡本: ワイルドって言葉、何年か前に流行りましたね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

安間:我々がワイルドを使い始めたのは、それよりずっと前の話だと思いますよ。2001年に書いた本でワイルドインベスターズという言葉を使っていますので。シリーズ化して、どんどん出していくつもりでした。

岡本:あれはとても良い本ですよ。

安間:ありがとうございます。今でもお褒めに預かることがあるので嬉しく思っています。会社名については、やはりもう少しスマートな感じが良かったんですけどね。運用会社でワイルドって名前だと、何されるのか不安を与えますよね(笑)。

岡本:確かに。やたらと、ドタンバッタンやるような印象は与えるかもしれませんね。

安間:そうですね。でも実際はそんな事はなくて、どちらかと言うと草食系に近いんですけどね。でも、時代が変わっても、破滅的な事が起きても生き残るというのをテーマとして、それを目指してやっています。

岡本:投資対象は、世界の株式ですか。

安間:そうです。ずっと個人向けのグローバルファンドをやっていたので、日本株もその中のひとつの資産として捉えています。株も債券もコモディティも、それこそ仮想通貨を見るときもあります。仮想通貨には投資はしませんが、仮想通貨が何かに連動している可能性はあって、相関や逆相関、それが遅れて出る場合もありますが、そういう観点でチェックしていますので、朝起きてまずやる事は、モデルを回してデータ分析する事なんです。だから全然ワイルドじゃないんです。

岡本:日本株を敢えて避けている訳ではなく、結果として日本株が対象に入らないということだと思いますが、そうなる理由は何なのでしょう。

安間:元々私自身が、ファンドマネージャーとして企業訪問をするタイプではなく、パブリックな情報や決算データから見るタイプなんです。なぜかと言うと、訪問して経営者に会ってしまうといろいろな事を飲み込んでしまうことがありそうで、それを避けたいのと、数千社ある中から、一つをピックアップしてそれが当たっている自信が持てないので、データを集めてスクリーニングするということをしています。

また、日本株は長い経験をしていてもデータを読めないという事もあります。例えばアメリカの場合は、設備稼働率やドルレートなどを見ていると値動きの見当が付くのですが、日本株に関してはよく分からないんですね。以前、注目していた銘柄の価格が下がり始めたので、



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

買い時だなと思っていたんですね。するとガーンと下がった引け後に増資が発表されたのです。下げ始めからきっちり希薄化分だけ下げて止まっているわけですから、発表前に情報が洩れているとしか考えられません。アメリカはそういうのには厳しいのですが、日本はまだまだその辺りが整っていないのかもしれないかもしれません。仮に押し目買いを実行していたら、よいカモにされるパターンでした。なので、自分の能力と適性の問題で、あまり日本株は得意ではないのです。私よりも日本株が得意な人は大勢いると思っています。自分はそれほどでもないし、やり方も合っていないと思っています。

岡本: 一般的な日本株の投資家の場合、情報は集めやすいですよ。海外にそれを求めた場合、言葉の問題が出てきたりしますが、こういった状況で、安間さんにお金を預ける投資家側に抵抗を持たれることはありませんか。

安間: 私の場合、データを見て、継続的に利益を上げている企業を対象として投資をしています。大体そういう企業は参入障壁に守られていたり、ユーザーが離れない構造になっていることが多いです。このサービスを使い始めたら抜けられない、そんなサービスをやっている会社です。それは産業構造的にそうなる場合もありますし、ユーザー自らが参入障壁を作るというケースもあります。例えばマイクロソフトのエクセルやワードで仕事を始めたら、もうそれらを手放せなくなるといったことです。

岡本: 確かに、今更ほかのソフトウェアを使うことはできないですね。

安間: そうなんです。ユーザー自らが参入障壁を作っていて、税金のような利益を捧げているんですね。私はそういうサービスを見つけたら、その企業の株を買うことにしています。

岡本: 例えば、クレジットカード情報までを登録してしまっていると、アマゾンで買い物をするのと同じですね。わざわざほかの所に新たに登録し直すのは面倒になりますね。それも同じような話ですね。

安間: アマゾンで衝撃的だったのは、タブレット端末ですね。元々、PCの前に座って7画面くらいのモニターで仕事をしていることが多いので、タブレットは必要なかったんです。でも使わずに批判するのもよくないので、セールで一番安いタブレットを買ったんですよ。使ってみると、無料のビデオ、無料のマンガ、無料の書籍があって、気が付いたらアマゾン中毒になっていたんですね。私はお金を出してアマゾンのお買い物端末を買っていた、というわけです。悔しいからアマゾン株を買い増しました(笑)。

さすがにこの会社スゴイと思いましたね。一番ひどい時には、アマゾンのタイムセールを心待ちにする自分があるんですね。本来であれば、ビデオやマンガに時間を使うなんて、私が考える人生にプラスになる訳はないのにやっていたんですね。何が言いたいかというと、ユ



長期投資仲間通信「インベストライフ」

一ザーが自分でお金を出してさらに参入障壁を作っている、こんなビジネスをやっている、これがスゴイ事なんですよ。

岡本: そういう話の中で、マイクロソフトとアップルの関係はどのように考えていますか。

安間: 基本的にハードウェア対ソフトウェアであれば、ソフトウェアが優位なんだと思います。ソフトウェアは生き残るんですけど、ハードウェアは寿命が短いですし、ハードウェアメーカー同士の競争が厳しいので、収益を上げ続けるのが難しいんですね。とは言え、アップルは iPhone という例外的なハードウェアを出した企業です。私自身も iPhone ユーザーなのですが、何故みんながあんなに高いお金を出して買うのかが不思議です。好きな企業なのですが、投資対象としては見ていないですね。アップルよりももっと良い企業があると思っています。

岡本: 安間さんは「永久保有」という事をおっしゃっていますが、それは永久保有に適するファンドという考えですか。

安間: そうです。銘柄はたまに入れ替えます。

岡本: 入れ替えは数年に一度くらいですか。

安間: たまたまこの数年は入れ替えが無かったです。生活必需品を提供する銘柄とアグレッシブに成長が見込まれる銘柄に分けて、それを 8 対 2 くらいの比率で構成しています。暫くこれを放置していて、6 対 4 くらいになったのですが、それが非常に上手くいったパターンでした。2 割の方の成長銘柄が、どんどん上がっていきました。

岡本: それは IT 関連銘柄が多かったのですか。

安間: そうですね。社会のインフラと化していて、いわゆる手放せないサービスとして半ば税金のような収益を上げている会社、あとは、レバレッジが効いている会社ですね。これは青天井に儲かる会社です。モノづくりをしている会社よりも、情報やソフトウェアの方が、勝者総取りになりやすいんですよ。

ソフトウェアの場合、先ほどの例で言うと、やはり周りがマイクロソフトのワープロソフトを使っていたら、それ以外の会社のソフトを使っている人もマイクロソフトに合わせることになるんですよ。こういうことが構造的に勝者総取りになりやすいのだと思います。こうなるとどこまで儲かるか分からないですね。最終的に世界制覇するまで終わらないのだと思います。決してそれが健全だとは思いませんが、基本的にはひとつのサービスやソフトウェアが独占するようになるのだと思います。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本: バフェットみたいな投資スタイルというのは、どう考えますか。

安間: まさに永久保有ポートフォリオの基本はバフェットです。詳しいことは、拙著「ホントは教えたくない資産運用のカラクリ(4)」という本に書いたのですが、それに加えて、バフェットが「生活必需品のような、人が使わざるを得ないことで収益を上げている企業に投資しろ」と言っていることをやっています。ところが生活必需品については状況が変わってきていて、例えば新聞は生活必需品ですが、今は、新聞社やテレビ局はネットが普及したことで、攻められている立場になってしまっています。逆にネットの方が勝者総取りの企業でありながら、さらにアップサイドが期待できるような銘柄が生まれてきています。こういった銘柄も、弊社が提供しているポートフォリオに組み入れています。

岡本: バフェットは、基本的に生活必需品のような銘柄を好んで保有していると思いますが、段々とシフトしているんですか。

安間: とても生意気な事を言わせていただくと、私もこの流れに遅れている部分がありますが、バフェットはそれ以上に遅れていると思います。もちろん彼のことは大好きですし、とても尊敬していますが、こういう部分があるのは事実です。

岡本: それはバフェットの年齢的な部分もあるのでしょうか。

安間: やはり年齢的、世代的なものは必ずあると思います。私自身も若い世代の感覚には多分ついていけないです。でもそれは経験から、勝者総取りでライバルがいなくて独禁法などの国しか敵になれないような企業を選ぶようにしています。

岡本: 個人投資家に対して、これだけはやってはいけないというメッセージはありますか。

安間: なんでもありでよいと思っています。これは岡本さんも近い考えだと思いますが、弊社の運用は長期の資産形成としてやっています。もちろんバタバタと短期で売り買いを繰り返すのが楽しいのも分かっていますし、その才能がある人がいるのも分かっています。私にはその能力がないので、持っている人は尊敬します。でも、一般の方がそういった事に任せておいて安心できるかといったら、それは違うと思っています。

弊社のことをお話すると、過去6年くらいパフォーマンスが非常に良いのですが、これは正直出来過ぎだと思っています。私は年間に配当込みで15%取ればよいと思っているんですが、中には15%では少ないと言う人もいます。でも年間15%にリターンだと5年で倍になりますよね。10年で4倍です。これをスゴイ事だと感じられる人は、多分弊社のやり方に共感してくれると思っています。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本: 個人投資家へのアドバイスとしては、楽しみであるならば短期で売買するのは構わない。これはゴルフやカラオケなどのお金を使って楽しみたいというのと同じですよ。ただそれと退職後の生活をどうするか資産運用というのは、意味合いがかなり違うので、そこはよく考えてほしいということですね。

安間: はい。自分の生活を脅かさないのであれば、個人は何をやってもよいと思います。ただ、長期の資産運用をするのであれば、私はグローバル投資を薦めますね。なぜかという、世界中でちゃんと資本主義国家を運営しているのはアメリカしかないと思っています。日本は怪しいですし、ヨーロッパはかなりダメです。そもそも、整備された投資市場そのものがかなりの贅沢品なんですね。例えば、お金が持ち逃げされない、粉飾決算がない、国によって勝手に売買や出金が停止されない、なんていうのは先進国だけが持っている機能で、その中でもアメリカが一番健全に資本主義を回しています。日本はだいぶ社会主義に向かっていて感じています。もちろん個別には面白い銘柄はありますが、収益性や社会全体の状況を合わせた上で考えるとアメリカ市場になりますね。

岡本: 先ほど、安間さんが銘柄を選ぶときの基本的な考え方を挙げていただきましたが、もう少し具体的に、重視しているポイントを教えてください。

安間: 基本的にライバルがない産業構造やサービスという話をしましたが、こればデータに表れると思っています。例えば、単純な話でいうと営業利益率です。これが高いのは重要なポイントです。ただし一過性ではなく、5年以上継続するのが大切です。5割を超えるような利益を長期に渡って続けている銘柄というのは実際にありますね。これは競争力の源泉になります。日本市場にもそういった銘柄はありますが、今は株価が高くなっていると思います。景気が良い時には人気化してしまって、手を出しにくくなってしまいます。売られた時に買っておくのはよいと思いますが、今はその時期ではないですね。

岡本: なるほど。今は景気はかなり熟した状態であるという事ですか。

安間: そうですね。ただ、アメリカ株に関しては、これで終わりではないだろうと思っています。というのは、今の状況はドットコムバブルの頃にとてもよく似ています。アメリカだけが景気が良く、他のところはダメで、アメリカだけが引き締めをして、他の国は緩和をするといった状況で何が起るかという、みんなアメリカに投資するようになります。実際に、1994年にアメリカの金利が上がり始めた後に株価が調整に入りました。ところが翌95年から株価がスルスルと上がり始めたんですね。対数グラフで見ても明らかに角度が変わっています。アメリカのS&L危機が完全に終わって、そこから始まったんですね。

当時、マイクロソフトやアップル、オラクルやサンやシスコあたりの銘柄が注目され始めた頃で、その頃はそれがバブルになるなんて誰も思っていなかった。すぐにダメになるとみんなが



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

思っていたんです。でも何が起きたかという、ものすごいバブルが起こった。みんな莫大な借金をして投資をして最終的に潰れていったところもありましたが、その背景にはアメリカ以外の景気が全然ダメだったことがあると思っています。

97年から98年までにはアジア危機がありました。私はこの震源は日本だったと考えています。日本の金融機関がバタバタと倒産して行って、信用収縮が起こって、世界中の金が日本から引き上げられたんです。でもその時でもアメリカは2割程度の調整で済んでいるんです。これはほぼ無傷だと言ってよいと思います。この後、日本が財政出動で金融緩和をガンガンやったのですが、その金は日本に投資されずにアメリカに投資されたんです。アメリカでドットコムバブルが起きて、そのおこぼれにあずかる感じで日本でもITバブルが起きたのが99年でした。

今はこれとそっくりだと見ています。しかも、弊社の認識では、まだ上昇相場のハーフタイムにもなっていないと思っています。それは新興国がクラッシュしていないからです。新興国クラッシュが起きて、アメリカが今は金利引き上げできない。その他の国はもっと金融緩和して財政出動するようになって、後半とんでもなくブチ上がるというのが今の読みです。まだ、天才投資家も出てきていないですね。

岡本さんも感じているかもしれませんが、今、バブルのピークの兆候ってないですよ。だれもが浮かれて、運用しない奴はおかしいと言われるような事はないですよ。仮想通貨ではありましたが、一般の人を巻き込んでまでの状況にはないと感じています。しばらく揉み合いは続くと思いますが、アメリカ株が9年も上げ続けてまだハーフタイムにも至っていないと考えると怖い話だと思います。

岡本: いつバブルが終わったとハッキリわかるわけではないですよ。鐘が鳴ってこれでおしまいというのはない。バブルが終わってから暫く経ってからあれはバブルだったんだと分かるものです。これからも勉強は続いていきそうですね。今日は興味深い話をありがとうございました。